

中山間地域における アウトドア・スポーツツーリズムの可能性 — 岐阜県郡上市を事例として —

坂本 桂 二*1 大野 貴 司*2

- 1 はじめに
- 2 スポーツツーリズムにおける参加者行動
- 3 アウトドアスポーツの機能
- 4 岐阜県民のアウトドアスポーツ行動の状況
- 5 郡上市のアウトドアスポーツの状況
- 6 アウトドアスポーツ発展の課題
- 7 まとめ

1 はじめに

中山間地の地域経営戦略の柱の一つとして、観光誘客がある。岐阜県北部（典型的中山間地）に位置する郡上市は、面積の9割以上が森林に覆われ、スキー場、ゴルフ場、キャンプ場、野外テニス場、フィッシングスポット、トレッキングコース等に恵まれ、アウトドアスポーツポテンシャルが非常に高い地域である。その空間（ハード）に、付加価値の高いソフトを加えれば、本稿で考察の対象とする岐阜県郡上市（以下郡上市）は「アウトドア・スポーツツーリズム王国」となるポテンシャルが高い。それは郡上市の観光戦略の大きな柱になりうる。

近年、人々の健康意識の高まりの中で、スポーツへの関心が高くなっている。広辞苑（1998年度版）で「スポーツ」の意をみると、陸上競技、野球、テニス、水泳、ボートレースなどから登山・狩猟などにいたるまで、遊技・競争・肉体的鍛錬の要素を含む身体運動の総称とされ、その野外スポーツに観光旅行的要素を加えたのがアウトドア・スポーツツーリズムである。

人々のスポーツへの関わり合いは、住居近辺でのウォーキングから本格的なアスリートを目指したスポーツまで多様であるが、高齢化、自

由時間の増大等の中でスポーツだけ、観光だけということに飽き足りない人々は、それが一体となった、さらには健康要素が付加されたスポーツツーリズムに関心が高まっている。今日、子供の体力・持久力・瞬発力等の低下が社会問題化している。子供の体力低下の大きな要因は、遊びを忘れた家庭、親、地域、学校にある。少子化の中で遊ぶ友達がいない子供、子供の遊び相手ができない親、遊ぶ場所がない地域等「遊び」環境は悪化の一途をたどっている。特に、遊び環境が悪化しているのが都市部であるが、そこに「遊び」環境の全面的復活を求めることは非常に難しい。多くの人（特に子供）への遊び場の提供には、都市部と中山間地域の連携が不可欠である。中山間地域は遊びのフィールドは豊かで、新鮮な空気の中で、地域特産の新鮮な農産物を食しながらの遊びは、子供の健康、体力（筋力、持久力、瞬発力、バランス力、柔軟性等）アップ、心のリフレッシュ等に有効である。しかし、今の子供達は学校体育で学ぶ種目が中心で、遊ぶという観点での運動ノウハウを持ち合わせていないし、野外でのアウトドアスポーツインフラ、ソフト面の環境整備が十分とはいえないが、郡上市は他地域よりその環境整備が進んでいる。また、中山間地域に出かけて行き、アウトドアスポーツを楽しむには、その行程も楽しくする必要がある。幸いにして、郡上市には長良川鉄道が通っている。その鉄道を活用すれば魅力は倍増すると考えられる。例えば、子供が中山間地域に遊びを求めて出かけるにしても、親が車に乗せて、現場に直通するよりも、子供が、場合によっては親の力を借り

* 1 長良川鉄道株式会社専務取締役、岐阜経済大学地域経済研究所奨励研究員

* 2 岐阜経済大学経営学部准教授

ながら、その場への鉄道を利用したアクセスプラン（列車内でのアウトドアスポーツレッスン等）をたてて行くことが楽しさを倍増させる。もちろん、幼児にそれを求めることはできないが、幼児には幼児ならではの、鉄道を利用したアウトドアスポーツプランがある。そこで、本稿では典型的な中山間地域といわれる郡上市を事例にしてアウトドア・スポーツを目的とした旅行であるアウトドア・スポーツツーリズムの現状等を分析し、その発展の可能性について考察することをその課題とする。

2 スポーツツーリズムにおける参加者行動

スポーツツーリズムはグリーンツーリズム、エコツーリズム、ヘルスツーリズムのように広くは認知されていないが、遊び感覚の「するスポーツ」はみんなの願いであり、「健康」とリンクし、その需要は高まっていくと予想される。欧米ではスペシャル・インタレスト・ツーリズムの一分野として成長している。岐阜県では平成24年度に「ぎふ清流国体」が開催され、岐阜県全体のアウトドアスポーツポテンシャルから考えるとポスト清流国体の大きなテーマとなりうる。

スポーツツーリズムは、そのための素晴らしいインフラが整っているだけでは成立しない。その参加者のニーズ、ウォンツなくしては成立しない。参加者のニーズ、ウォンツは多様である。参加者がスポーツツーリズムに参加する時には「スポーツと旅行」へのニーズを潜在的に認識し、それをウォンツにまで高め、その実現のための情報（スポーツツーリズム開催内容、場所、時期、日時、料金、旅行時間等）を集め、それをベースにして行動決定すると推測される。このことについて、原田・木村（2009）では登山者の行動を想定（往復の所要時間、コースの難易度、季節、登山道の混雑度等の諸条件について検討して決定）して、登山における参加者選好のコンジョイント分析を試みている。その結果によれば、定期的な登山者は春・秋の季節で混雑していない時に、一定レベル以上の登山

を楽しみたいとしている。スポーツツーリズム振興のためには、参加者（観光者）の選好構造を分析し、ターゲットマーケティングを進める必要がある。また、参加者（観光者）の行動を理解するAIDMモデル（観光地を意識し、観光地に興味を持ち、観光地に行くことを欲し、観光地を覚え、観光地に実際に行く）の参加者（観光者）行動プロセスを踏まえたプロモーション等も必要となる。特に、インターネットからの情報を下に参加（観光）行動を起す人が多くなっており、情報化時代にはスポーツツーリズムDESTINATION情報（スポーツ施設としての自然資源、アウトドアスポーツの拠点となる自然資源等）の発信に工夫が地方公共団体等に求められる。野外におけるアドベンチャーの領域に対する需要が高まっており、情報発信に工夫が必要となる¹。

3 アウトドアスポーツの機能

アウトドア・スポーツツーリズムは、スポーツの機能を非日常空間で、楽しく、遊び感覚で享受できることに人気があり、スポーツの機能を認識しながらアウトドア・スポーツツーリズムの基本戦略を構築していく必要がある。以下でその機能について考察する。

3-1 健康機能（身体的・精神的効果）

健康を目的にアウトドア・スポーツツーリズムに参加する人が多い。スポーツの行動意識のアンケート結果「スポーツライフデータ2006」をみると、第1位が健康のため（53.7%）、第2位が運動不足解消のため（45.6%）、第4位が体力・増進のため（40.0%）、第6位 ストレス解消・気分転換のため（35.3%）、第9位 減量や体重維持のため（20.2%）と健康関係項目がベスト10に5項目入っている。

アウトドアスポーツの一つとしてウオーキングが盛んであるが、その大きな目的は健康である。現実にその効果は高い。東北大学大学院医学系研究科医科学専攻社会医学講座公衆衛生分野の公表データをみると、1人当たりの1ヶ月

の平均医療費と1日の歩行時間には関連性がみられ、歩行時間が長いほど医療費が低く抑えられている。さらに、歩行時間が1時間より短いグループと長いグループに分けると、短い時間のグループは、1人当たりの1ヶ月の医療費は19,800円で、長い時間のグループより13%と高くなり、1人当たりの4年間の医療費総額は、歩行時間が長いグループ(633,900円)に比べ、短い時間のグループ(821,300円)は高くなっている。入院日数も歩行時間が短いほど多くなる傾向がみられる²。

スポーツがもたらす心身への医学的影響について、医療法人・幸良会・シーピーシークリニックの武元良整氏は、スポーツの医学的影響について①心臓血管系(安静または運動時の心拍数低下や血圧下降作用、心筋酸素消費量の減少等)、②代謝系(肥満の改善、脂質代謝の改善等)、③生活習慣への影響(喫煙習慣の抑制、ストレスの緩和等)をあげている³。以上のように、スポーツが健康に有効であることが実証され、そこに多くの人が期待をしている。特に、マイナスイオン、オゾン、フィトンチッド一杯の大自然の中でのスポーツは、日々疲れた心をリフレッシュさせ、明日の英気を養う。

3-2 教育機能

最近の子供達は、集団の中で、遊び、ルール、マナー、礼儀、相手への思いやりなど人間関係を築くことが希薄になっている。大自然の過酷な条件の中で仲間が互いに助け合い、スポーツ目標を追求していく過程は、自然の厳しさの中で自分を守る大変さ、助け合いの大切さ、自然を守る心、ルールを守る大切さ等を学ぶことになる。その場を提供するのがアウトドアスポーツである。そこには机上の知ではなく、現状即応の「知」が求められ、知育にも有効に機能する。

3-3 地域活性化機能

(社会的効果・経済的効果)

3-3-1 社会的効果(まちづくり効果)

「スポーツボランティアへの招待」(山口、

2004)では、スポーツでまちづくりをした都市を①イベント型(ビッグイベント型、地域イベント型)②施設・キャンプ型(拠点施設・クラブ型、スポーツキャンプ型)③スポーツリゾート型(高原リゾート型、海洋リゾート型)④スポーツ種目型(競技スポーツ型、ニュースポーツ型)に4分類し、スポーツキャンプ型の上田市菅平(ラグビー・キャンプの町)、プロ野球のキャンプ地としての宮崎市等を、高原リゾート型として長野県の軽井沢町等をあげている。

岐阜県のアウトドアスポーツでのまちづくりの代表例は、高山市・下呂市である。そこには、アメリカのコロラド州ボルダー(標高1,650m)、中国の雲南省昆明(標高1,850m)、スイスのサンモリッツ(標高1,775m)に匹敵する高地トレーニングエリア(飛騨御嶽)がある。高地トレーニングは、高地の酸素の薄い状態でのトレーニングにより、心肺機能を高めるものであり、オリンピック金メダリストの高橋尚子、野口みずき等が高地トレーニングで輝かしい成果を上げたことは周知のことである。飛騨御嶽高地トレーニングエリアは、標高1,200mから2,200mに位置し、標高に合わせてトレーニング(チャオ1,800m、ゴンドラ山頂駅周辺2,200m)を可能とし、このエリアは「ナショナルトレーニングセンター競技別強化拠点(高地トレーニング)」に平成20年5月に指定された。施設としては、全天候陸上競技場、サッカー、野球も可能な高根総合グラウンド、バレーボール等ができる飛騨日和田体育館、ウッドチップランニングコース(標高1,800mから2,200m)、飛騨御嶽尚子ロード(標高1,676mから1,882m)等がある。この施設には、毎年有名マラソンランナー等がスポーツ強化トレーニングに訪れ、その数は平成18年度81団体13,394人、平成19年度95団体、17,410人と毎年増加している。最近では、ここで、フランスの「男1,500m、3,000m障害」の選手が北京オリンピック入り直前の、また大阪世界陸上競技大会直前のトレーニングをしている。ここは海外からも注目されており、高山市、下呂市は地域住民と一体となって高地トレーニングのまちづくりを進めている。また、これら

の国内外のトップアスリートの練習風景を一目見ようとツアー客も多く訪れる。これらにより、岐阜県、飛騨御嶽高原のブランド力は高まり「アウトドアスポーツのまち」となりつつある。

また、川辺町には全国でも有数の漕艇場があり、全長4,500mの練習水域の中に直線1,000mのポートコースがある。ここでは、東アジア国際大会、高校総体等の多くの大会が開催され、2012年のぎふ清流国体の会場にもなっている。子供達も小さい頃からボートに親しみ、学校にはボートクラブがある。過去においては、毎年ボート教室（現在は中止）を開催し岐阜県内のみならず、県外からも参加を得ている。ボートを通じたまちづくりは、町民の一体感、地域力を高めたばかりでなく、ボートのまちとして名が知られるようになった。

3-3-2 経済的効果

最近、健康志向の高まりの中で、マラソン、ウォーキングに人気が集まっており、身近なスポーツの市場が拡大している現実がある。平成21年4月25日の毎日新聞の朝刊「市民マラソン熱」(百留康隆著)の記事によれば、身近な市民のマラソン熱による波及効果で市場は潤っているという。こうしたスポーツイベントで訪れる

人は地域で平均5千円程度の消費をし、地域産業への直接的経済効果をもたらしている。また、その波及効果は1.4倍程度と推計され、その効果は大きいものがある。

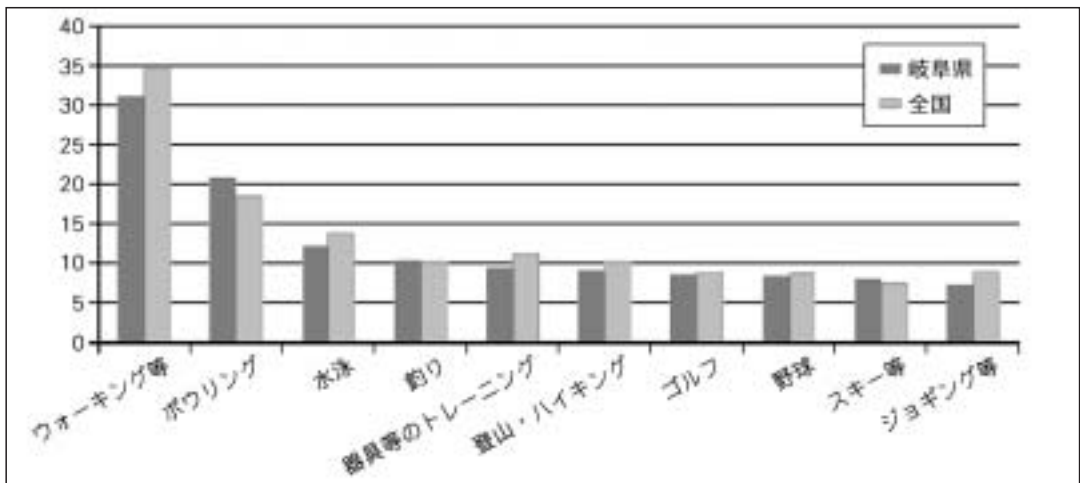
地域のアウトドアスポーツ資源を生かした行政、住民等の取り組みは、岐阜県、市町村に経済的効果をもたらしている。スポーツの経済的価値を認識し、アウトドアスポーツと地域産業の関係を深め、おみやげ等の地域製品の付加価値を高めていくことが求められている。

4 岐阜県民のアウトドアスポーツ行動の状況

図1の岐阜県民の平成18年の種目別スポーツの取り組み行動者率ベスト10の状況を見ると、高い順に、ウォーキング・軽い体操(31.3%、全国34.9%で第34位)、ボウリング(20.9%、全国18.6%で第5位)、水泳(12.1%、全国13.8%で第22位)、釣り(10.3%、全国10.0%で全国第28位)、器具を使ったトレーニング(9.3%、全国11.2%で第35位)、登山・ハイキング(8.9%、全国9.9%で第19位)、練習場を含むゴルフ(8.4%、全国8.9%で第21位)、キャッチボール含む野球(8.2%、全国8.6%で第27位)、スキー・スノーボード(7.8%、全国7.3%と第18位)、ジョ

図1 岐阜県民の種目別スポーツ行動者率ベスト10比較

単位：%



出典：SSF笹川スポーツ財団(2006)

ギング・マラソン(7.2%、全国8.8%で第43位)となっており、ベスト10にアウトドア系スポーツが7種目入っており、岐阜県はアウトドア系スポーツ王国ともいえる。スキー・スノーボード、釣りは全国水準を上回る。

全国水準を上回るスキー・スノーボードが高いのは、岐阜県北部にスキー場が多い等の特性(文部科学省の平成17年社会教育調査によると人口10万人当たりスキー場等数は全国平均の2.89倍)によるものと推察される。釣りは、木曾川、長良川、揖斐川の三大河川を有し、一級河川延長は3,268km(平成13年国土交通省河川調査資料)の全国第5位(全国の3.7%を占める)と長いことによると推察される。一級河川延長が短い大都市地域の「釣り」の行動者率は8.5%と低いと推察される。

しかし、岐阜県は奥穂高岳、槍ヶ岳、乗鞍岳等有数の山を有し、森林面積が865,674ha(平成17年農林業センサスによると全国第4位)と広いにもかかわらず登山・ハイキング行動者率が全国水準より低いことは、岐阜県は製造業労働者が多く、肉体的にきつい登山が敬遠されていること、自然一杯の環境のなかで暮らしており自然に多くの魅力を感じないこと等によると推察される。一方、ホワイトカラーが多い大都市住民は、郊外の自然環境に触れ精神的リフレッシュと、日頃の運動不足解消にハイキングを選択する率が岐阜県より高い。レジャー白書(2007)で「ピクニック、ハイキング、野外散歩」参加率をみると、岐阜県は13.9%に対して、東京都は31.7%、千葉県は26.2%、埼玉県は26.8%、神奈川県は31.4%、愛知県は23.7%、大阪府は23.2%となっている。また、人口100万人当たりゴルフ場事業所数が全国を上回る(平成16年サービスマネジメント調査等によると、ゴルフ場は岐阜県39.8、全国21.3、ゴルフ練習場は岐阜県28.0、全国23.5)にもかかわらず練習場を含むゴルフへの取り組みが低いのは、1回当たりの消費額が高い(レジャー白書2007によるとゴルフコース11,350円)ため、所得水準が低い岐阜県民(平成18年の毎月勤労統計調査によると現金給与額は全国の85.6%で全国第36位)には馴染みにく

い面があると推察される。アウトドアスポーツは、立地場所にも影響されるが、総じて自然に恵まれた岐阜県人より、都会人向きであるといえる。

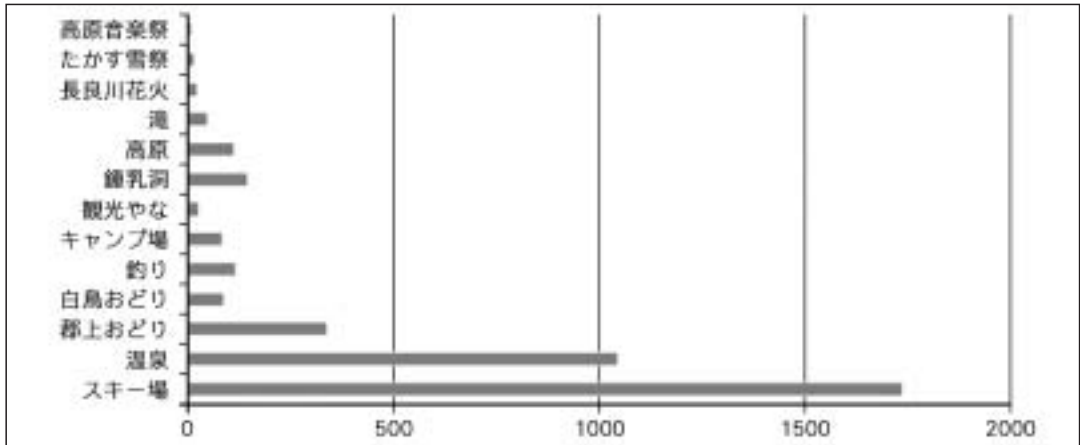
岐阜県は以上のようにアウトドアスポーツポテンシャルは高く、県外からアウトドアスポーツ行動者を迎える対応が求められる。また、近年シニア層(50歳代以上)にアウトドアスポーツが注目されている。全国シニアスポーツの状況をスポーツ種目ごとに、その実施率の変化(1996年と2006年の比較)をみると、ウォーキング・散歩は21.5%から43.3%へと大きく上昇し、筋力トレーニングは2.6%から4.5%に、ゴルフ(コース)は9.0%から9.5%に、ゴルフ(練習)は7.2%から7.4%と上昇しているが、登山は6.7%から4.6%に、ジョギング・マラソンは5.6%から3.6%に、ソフトボールは4.8%から2.8%に、卓球は3.8%から2.6%と低下している。総括的にいえば、軽めのスポーツ種目は増加し、強めの競技的スポーツ種目は減少しているといえる。また、種目別シニア参加比率は登山を除くアウトドア系スポーツは上昇し、全体的にスポーツ種目のシニア化が進んでいるといえる。2006年のその比率は、ゲートボール100.0%、ハイキング67.8%、ゴルフ(コース)63.6%、ウォーキング・散歩58.0%、登山56.8%、体操(軽い体操等)56.7%、ゴルフ(練習場)55.2%と、半数以上が50歳以上参加者となっている。また、シニア化予備軍(50歳代以上が45%以上を占める)として、サイクリング(45.0%)がある。アウトドアスポーツの人気、需用は高まりつつあり、気軽に、何時でも、どこでも、楽しむことができる環境整備が求められる。

5 郡上市のアウトドア・スポーツ ツーリズムの状況

アウトドア・スポーツツーリズムのハード・ソフトの整備が進みつつある郡上市のその状況は以下のとおりである(図2参照)。

図2 郡上市の平成20年度観光資源別観光客数（アウトドアスポーツ系）

単位：千人



出典：岐阜県観光レクリエーション動態調査結果（平成20年度）

5-1 スキー&スノーボード

郡上市には12のスキー場（アウトドアイン母袋、ウイングヒルズ白鳥、スノーウエーブパーク白鳥高原、高鷲スノーパーク、ひるがの高原スキー場、鷲ヶ岳スキー場、いとしろシャーロットタウン、しらおスキー場、郡上高原スキー場、ダイナランド、ホワイトピアたかす、めいほうスキー場）があり、スノーボードFISワールドカップも2度開催され、国内有数のウインタースポーツランドである。2008年スノーボードFISワールドカップの選手参加は世界25カ国から約260人が参加し、来場者は3日間で約2万5千人、直接的経済効果は約3億円と、郡上市の活性化に大きく寄与すると同時に、郡上市の知名度を大きく上げた。

スキー&スノーボード客はレジャーの多様化により減少しているが、その需要は根強いものがある。また、子供のスキー&スノーボード教室開催等は好評を得ている。郡上市はセントレア（中部国際空港）からの時間距離は短く、韓国、台湾、オーストラリア等からも注目されており、今後、海外からのスキー&スノーボード客は増えると予想される。スキー&スノーボードはスポーツのオフ期（冬場）にスポーツ機会を提供する最大の場であり、多世代で、しかもファミリーで楽しむことができるアウトドアスポーツである。

5-2 フィッシング

長良川水系、木曾川水系は全国でも有数のリバーフィッシングの場となっている。特に、長良川の清流での鮎釣り、あまご釣り、岩魚釣り、マス釣りは有名であり、釣りファンが地域外から多く訪れており、夏、冬の風物詩となっている。フィッシングは心のリフレッシュの場であると同時に、生物の自然循環を学ぶ場、生命の大切さを学ぶ場、自然環境の大切さを学ぶ場でもある。俳優の近藤正臣氏は、郡上の清流長良川の釣りに憧れ、郡上市に別荘を構え四季でのフィッシングを本格的に楽しんでいるという。その近藤正臣氏は、郡上市の強力な応援団となり、一市民として地域住民と一体となったまちづくりを進めており、アウトドアスポーツ推進の大きな副次的効果も出ている。

5-3 ラフティング&カヌー

近年、長良川でのラフティング&カヌーの人氣が高まる中、木曾川におけるカヌーがNHKで放映され、その人氣が一気に高まった。また、長良川ラフティング協会には14業者が加盟し、その振興を図っている。長良川は春から夏にかけてラフティングツアー客が多くなる。長良川は急流のところもあれば、流れが穏やかなところもあり、ラフティングツアー客に喜ばれる川である。従来、ラフティングツアーは車移

動を中心に民間会社が企画運営してきたが、平成23年度は鉄道に乗る楽しみとラフティングのスリルを楽しむ企画にバージョンアップされ、そのプランが用意されている。そのプランの一つが、「長良川ファミリーアドベンチャー」であり、そのコース紹介パンフレットをみると、長良川を眺めながらの長良川鉄道乗車、ラフティング、シャワーウォーキング、洞窟探検等が盛り込まれ、ラフティングでは美しい景色と穏やかな流れの中リバーツーリングツアーに出かけ、途中、白波の中、家族で協力しながら急流を乗り越え、流れが緩やかなところでは浮遊体験、岩場からの飛び込みチャレンジ等を行う。シャワーウォーキングでは流れのあるところで泳いだり、岩場を歩いたりする。洞窟体験では、ライトをつかい家族みんなで光のない世界を探索するとしている。この他、上記ラフティングツアーの半日バージョンが用意されている。

ラフティング&カヌーは常に危険との隣り合わせの中のスポーツであり、危険を予知し危険から自分を守る大変さ、仲間との助け合いの大切さ、生き抜く力等を学ぶ絶好の機会である。

5-4 ウォーキング&マラソン&トレッキング &サイクリング

郡上市は森林が面積の9割を超え、自然の恵みを体感できるネーチャーランドである。白山(昔の白山観光の客は、上り千人・下り千人・宿に千人といわれた)、高賀山、大日岳、瓢岳等での登山、トレッキングは人気があり、そのため長良川鉄道利用客も多い。郡上地域活性化協議会においては、フリーウォーキングコースを15設定(長良川鉄道レール&ウォーキング)し、何時でも、誰でも郡上の自然を満喫できるようにされている。また、沿線の自然を体感するサイクリングも人気があり、長良川鉄道は夏、秋(土日祭日)のサイクルトレン(美濃太田駅発6時26分、5人限定予約制)を運行している他、民間主催のレール&サイクルも展開されている。さらには、地域自然特性を生かしたマラソン開催、例えば、2日間をかけた名古屋～郡上市～金沢間の桜街道(昔、バス運行されて

いた名金線の運転手が沿線に桜を植えた道)マラソンが開催されている。

ウォーキング&マラソン&トレッキング&サイクリングは、アウトドアスポーツの中で、気軽に楽しむことができる一番ポピラーなスポーツであり、スポーツの効能を一番享受し易いスポーツである。

5-5 キャンプ場

郡上市には多くのキャンプ場があり、ファミリー向け、教育団体向け等多様な受け入れ体制が整備されており、四季の自然を体感できる。キャンプ場のコテージ等は冬場のスキー客等の宿泊場にもなっている。キャンプは親子の交流、仲間との交流を通じたコミュニケーションの大切さ、仲間との協働、助け合いの重要性等を学ぶ場である。

5-6 スポーツ合宿場

郡上市北部は、テニス合宿のメッカと言っても過言ではない。さらに、郡上市では、長野県の菅平のようなスポーツ合宿の場にすべく、カマス高原に芝生グラウンドを整備しており、今後サッカー、ラグビー等の練習のための合宿は増えると予想されている。体験教育研修としても注目されている。合宿を通じたチームワークづくり、競技技術力のレベルアップ等は競技力アップに大きく貢献する。

また、プロスポーツプレーヤーのオフの練習の場にもなる可能性は高く、これらの場での一流選手との交流は、スポーツにおけるゴールドエンイジといわれる小学校4年生から6年生の子供にとっては一流選手のスポーツテクニックをイメージで会得できる絶好の機会ともなる。

5-7 ゴルフ場

沿線には多くのゴルフ場が存在する。一時期のゴルフブームは去ったが、固定客は多い。海外からのゴルフツアーもあり、大自然の中で高原ゴルフは静かなブームになっている。ゴルフは競技スポーツとしてばかりでなく、シルバーエイジにとって楽しく健康管理ができるス

スポーツとして注目されている。

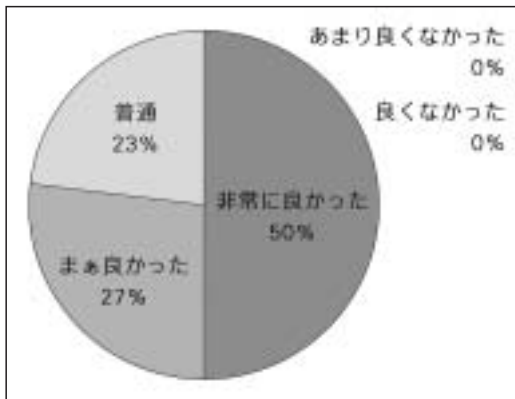
5-8 自然体験

郡上市では自然体験プログラムを実施するNPO法人等が多数ある。これらの組織が、野菜の収穫体験、牛の乳しぼり体験、自然観察体験、山菜取り、薬草取り体験、キノコ狩り、泥んこ遊び・バレー、ファミリー雪遊び体験（鎌倉づくり、スノーシューケル、そり等）木こり体験、まき割り体験、沢登り体験、洞窟探検、田植え体験、電柵づくり体験、猟師と山歩き、自然エネルギー体験等の各種の自然体験プログラムを提供しており、都会から多くの子どもが参加をしている。この拡がりは今後更に拡大すると予想される。また、ふるさと郡上会（都会からの移住者が主宰）が中心になって自然体験を総合的に体感できる「里山カレッジ」が開催されている。その体験は田舎くらしを視点にしており、スポーツとしての意味合いは低いかもしれないが、自然の中で体を動かす点では共通している。そこでの体験は、まき割り、鋏使いの体験、天秤棒で水運び、イワナの鷺掴み、沢登、里山サイクリング（舗装されていないデコボコ道）等である。

自然体験は提供されたプログラムを楽しむだけでなく、自ら自然体験プログラムを創る場でもある。

平成24年1月28日（土）に開催（岐阜県中濃振

図3 「郡上市高鷲の雪と自然を満喫する
ホワイトツーリズム」



出典：岐阜県中濃振興局（2012）

興局委託事業）した雪遊びを中心とした「郡上市高鷲の雪と自然を満喫するホワイトツーリズム」の旅行企画の評価は高く、良いと評価をした人は8割近くを占め、良くないと評価をした人はいなかった（図3参照）。「雪遊び」の参加者の意見は、「大人も楽しめた」「子どもがとても楽しそうだ」「スノートレーン、そりは大変楽しめた」「もっと雪遊びをしたかった」等である。

郡上市では、郡上市の自然資源を生かして、またその充実整備を図りながらアウトドア・スポーツツーリズムを推進しており、夏場の郡上おどり（これも、ある意味アウトドアスポーツであるといえるが）に大きく依存する観光構造の脱却を図っている。その効果も徐々に現れ、郡上市でのアウトドアスポーツを楽しむ観光客も増えると同時に、郡上市の長良川を始めとした自然、郡上市民の人情等に憧れ、大都会の若者が移住定住する事例が多々出現している他、その人たちがアウトドアスポーツによるまちづくりの大きな核になりつつある。中山間地におけるアウトドアスポーツの相乗効果は大きなものがある。

6 アウトドア・スポーツツーリズム 発展の課題

アウトドア・スポーツツーリズムは、まだマイナーな存在であり、その展開は緒についた段階で、その進展には課題が多い。以下にその課題を整理する。

6-1 アウトドア・スポーツツーリズムの 認知度が低いこと

アウトドア・スポーツツーリズムの全国的な認知度は低く、それは組織的な展開にまでには至らず、個人的レベルの展開でとどまっている。これは、観光といえば、今まで物見遊山的な短期周遊観光中心で、スポーツを核とした体験観光はまだマイナーな存在（日本人はまだスポーツを楽しむ文化を会得していない）であることによると推測される。自然のフィールドを生かしたアウトドアスポーツはスポーツの中で

も馴染みが薄い、最近の健康ブームに呼応して、空気のきれいな自然の中でのスポーツ活動に注目が集まっており、その魅力、機能、楽しさ等を如何にして情報発信するかが大きな課題となっている。自然の中でのアウトドアスポーツは泥臭い面があり、若い女性から敬遠される面もあるが、最近マイナスイオン、オゾン、フィトンチッドが一杯の大自然の中でのスポーツに魅力を感じる女性も多い。癒し空間の中でのスポーツは精神的なリフレッシュを図ることができ、そこでのスポーツは人と人の絆を強くし、当然として体力アップにもつながる。四季を忘れた現代人にとって、そこには感動があり、驚きがあり、楽しみがある。これを体験した人によるブログ、口コミ等で情報発信していくことが有効と考えられる。また、マスメディアが記事にしたいようなアウトドアスポーツ情報提供も重要になるが、郡上市のような中山間地域では、そのノウハウが少なく、専門機関、アウトドアスポーツ関連組織等からのノウハウ提供が求められる。また、情報発信する体制整備も必要となる。郡上市のような中山間地域ではその体制整備が遅れており、広域的な体制整備も含めてその在り方を検討していくことが必要となる。

6-2 アウトドア・スポーツツーリズム コミッションが未整備であること

日本ではアウトドアスポーツを誘致する組織はない。敢えていえば、観光客等の誘致をするコンベンションビューローである。

アメリカではスポーツ大会を誘致するスポーツコミッションが民間会社や非営利組織で運営され、その数は500以上あるが、日本では「さいたま市」で始めて平成23年10月3日にスポーツコミッションが設立された。それはアウトドアスポーツ誘致を大きな目的にはしていない。また、国土交通省の観光庁では2012年4月に、スポーツを観戦したり、スポーツ大会に参加したりする海外観光客を2020年までに800万人に増やす方針のもと、競技団体、旅行会社等が参加する「スポーツツーリズム推進協議会」を設置

した。しかし、この組織は中山間、過疎地域のアウトドアスポーツ誘客の戦力組織にはほど遠い。中山間、過疎地域の活性化の観点からもアウトドアスポーツ誘致の組織整備が課題となる。郡上市のような中山間地域ではこの組織を地域単独で設置することは困難であり、広域で連携して設置することが必要となる。

6-3 アウトドアスポーツの受け皿が未整備 であること

アウトドアスポーツを実施するには、トレッキングコース等のハードインフラ、指導者、プログラム、商品開発等のソフトインフラが必要となるが、それが未整備であり、初級者から上級者までそれぞれのニーズにあったアウトドアスポーツができるインフラ整備（素材は十分ある）が課題となる。その課題対応のためには、行政がアウトドアスポーツの有意義性を認識し、その展開について音頭をとっていくことが求められる。特に郡上市のような中山間地域では行政が積極的にリードしていくことが求められる。

6-4 アウトドアスポーツのマーケティング 力が弱いこと

戦略なきアウトドアスポーツ展開には限界がある。アウトドアスポーツ対象者をセグメントして、そのターゲットごとに差別化し、ターゲット別にプロモーションを進め、アウトドアスポーツのポジショニングを図る必要がある。アウトドアスポーツマーケティングを進めるにおいても、常に人のニーズ、ウォンツの変化を察知し、それに合った付加価値の高い企画商品を開発していくことが求められる。例えば、スキー人口は減少していると言われるが、じゃらんリサーチセンターが行ったスノーエリアマーケティング調査結果（交通新聞平成24年1月26日）によれば「若者や休眠層（昔はスキーに出かけたが現在は中止、その率は全体で55%、30歳から49歳では65%）の人たちに、スキー場は混んでいて、わざわざ出掛けても疲れにいくだけという印象を持たれていることが、スキー人口減少の最大要因であり、休眠層はスキーをレジャーと

して捉える傾向が強く、アフタースキーの楽しさをPRすればスキーヤーを呼び戻すことは可能」としており、スキーだけでなく、レストランで地域ならではの美味しい料理が楽しめるとか、ゲレンデでコンサートを開催するとかのアフタースキーの演出が必要となる。今、官民連携のスキー振興プロジェクトが立ち上がり、若年層、ファミリー層をターゲットにスノーレジャー復活の多様な取り組みがされており、期待したい。また、人は飽きやすく企画のマンネリ化（最高3年で全面ブラッシュアップ）を避けることも必要である。

また、中山間地域のアウトドアスポーツのプロモーション体制は脆弱である。行政もその魅力、重要性を熟知していなく、そのサポート体制はできていない。現在の姿は、大都会から田舎への移住者した人たちがITを活用して細々と情報発信しているレベルであり、今後、行政が主体になってアウトドアスポーツを商品として旅行社に売り込むとか、体験教育商品として学校等に売り込むことが求められる。中山間地域の大きな魅力（強み）は野外のフィールドである。この強みを伸ばしていくことが過疎対策にもつながり、その展開は相乗効果がある。郡上市のような中山間地域への国、県、アウトドアスポーツ関連組織等からの全面的サポートが求められる。

6-5 新たなアウトドアスポーツ資源の発掘が必要なこと

アウトドアスポーツに魅力を感じるのは地域外の人である。地域外の人（都会人、若者、熟年者、女性等）で、ターゲット別（性別、世代別、職業別等）に魅力のあるアウトドアスポーツ地域資源の再整理、掘り起こしをする必要がある。中山間地域への移住定住若者は大きな力となり得る。郡上市にはその者は増えつつある。

6-6 アウトドア・スポーツツーリズムネットワークの構築

現在のアウトドアスポーツの展開は単発であり、拡がりがない。今後、自由時間の増大、健康

志向等からアウトドア系スポーツツーリズムに拡がりを持たせるためにはネットワークの拡充が必要である。例えば、エージェントとのネットワーク、学校（大学も含む）とのネットワーク、各種のスポーツ組織とのネットワーク、ゆかりのあるトップアスリートとのネットワーク、スポーツインストラクターとのネットワーク、企業の福利厚生部署とのネットワーク、スポーツボランティアとのネットワーク等である。郡上市のような中山間地域ではヒューマンネットワークは弱く、行政等の全面的支援が必要となる。

7 まとめ

日本ではアウトドアスポーツはまだマイナーなスポーツであるが、欧米では人気スポーツの一つである。日本でも大自然の中でのスポーツは徐々ではあるが、今後脚光を浴びていくと考えられ、それに向けてのハード・ソフトの整備が求められる。また、スポーツ観光はグローバルに展開がされており、それを意識しての整備が必要となる。スポーツツーリズムは観光立国戦略の一つになっており、日本全体でアウトドアスポーツ振興がされれば、その裾野は広がっていくものとする。このスポーツが盛んになれば郡上市のような中山間地域では活性化にもつながり、過疎化の歯止めにも、また崩壊しつつあるコミュニティの再生にも繋がると思慮される。

アウトドアスポーツ振興には多くの課題があり、その課題解決に向けて官民一体になった取組を期待し、まとめとしたい。

注

- 1 原田・木村 (2009)、71-74頁
- 2 東北大学大学院医学系研究科医科学専攻社会医学講座公衆衛生分野 (2012)、<http://www.pbhealth.med.tohoku.ac.jp/node/286/>、最終アクセス2012年11月30日
- 3 『鹿児島県医師会報』39号 (2007年10月号)

参考文献

- SSF笹川スポーツ財団『スポーツライフデータ』2006年
SSF笹川スポーツ財団『スポーツ白書』2006年
鹿児島県医師会『鹿児島県医師会報』第39号、2007年
岐阜県『岐阜県観光レクリエーション動態調査結果』2008年、
[http://www.pref.gifu.lg.jp/kanko-bussan/shiru/
kanko-tokei/20kekka.data/20kekka.pdf](http://www.pref.gifu.lg.jp/kanko-bussan/shiru/kanko-tokei/20kekka.data/20kekka.pdf) (最終アクセス2012年11月30日)
岐阜県教育委員会『市町村社会体育状況調査結果』2005年、
2008年
岐阜県総合企画部統計課『平成18年社会生活基本調査結果』
統苑別冊第5号、2008年
岐阜県中濃振興局『モニターツアー実施報告書』2012年
郡上市『郡上観光振興ビジョン2010』2010年
郡上地域活性化協議会『奥美濃・郡上』2010年
社会経済生産本部編『レジャー白書2007』2007年
東北大学大学院医学系研究科医科学専攻社会医学講座公衆衛
生分野「歩行時間と医療費の関連について」2012年、
<http://www.pbhealth.med.tohoku.ac.jp/node/286>
(最終アクセス2012年11月30日)
内閣府『体力・スポーツに関する世論調査』2004年
原田宗彦・木村和彦編著『スポーツ・ヘルスツーリズム』杏
林書院、2009年
毎日新聞社『毎日新聞』2009年4月25日朝刊
文部科学省『我が国の体育・スポーツ施設状況報告書』2004
年
文部科学省『社会教育調査』2005年
山口泰雄編著『スポーツボランティアへの招待』世界思想社、
2004年

